〔金杉名譽會頭古稀記念論文〕

アイヌ人頭蓋骨ニ於ケル外聽道
骨増殖症ニ就テ

J. Sawatari u. T. Hama: Über Exostosen des äusseren Gehörganges an den Aino-Schädeln.

北海道帝國大學醫學部耳鼻咽喉科學教室 (主任 香宗我部教授)

猿 渡 二 郎
濱 凱

緒 言

本學解剖學教室ノ兒玉教授ガアイヌ人ノ頭蓋骨ヲ發掘調査セラレタル際ニ、外聽道ニ骨増殖ノ存スルヲ發見セラレ、余等ニ其研究ヲ嚮導セラレタノデ、同教授ノ指導ノ下ニ解剖學教室ニ於テ、主トシテアイヌ人ノ頭蓋骨ニ就テ調査シテ見タノデアル。

抑モ外聽道ノ骨増殖ナル疾患ハ、臨牀家ノ之ニ遭遇スルノハ甚ダ稀ナルモノデアルガ、人類學的ニハ古代ペルー人ニ多ク發見サレテ以來、其出現分布ガ非常ニ興味ヲ牽ク様ニナツタモノデアル。

併シナガラ是ハ單ニ人類學者ノミナラズ、耳科臨牀方面カラモ共ニ討究スベキ疾患デアツテ、兒玉教授ガ特ニ余等、臨牀方面ニ携ハル者ニ其研究ヲ委ネラレタノモ、此趣意ニ他ナラズト信ズル。然ルニ臨牀の方面ニ於テハ疾患ノ稀有ナルコト、自覺の苦痛ノ乏シキトノ爲メデアルカ餘リ重要視サレズ、成書ニ於ケル記載モ甚ダ簡單ナノデアル。依テ余等ハ更ニ香宗我部教授ノ指導ヲ仰ギ、臨牀の事項ニ就テモ調査シテ見タノデアル。而シテ本症ニ就テ臨牀並ニ人類學兩方面ノ知見ヲ加フルコトハ、相互ニ興味ヲ増シ、

其孰レニ携ハル者ニトリテモ一層ノ有力ナル參考資料ヲ供スルモノナリト思惟スルニ至ツタノデ、本論ニ入ルニ先ダチ、諸種ノ文獻ヨリ取捨シテ、本症ニ關スル臨牀の事項ニ就テモ聊カ記述シテミルコトニスル。

臨牀の事項

定義。本症ハ其形狀ヨリシテ、從來本邦ニ於テ報告セラレタル名稱ヲミルニ、骨増殖症、骨腫、外骨腫、贅骨、骨瘤、骨性狹窄乃至閉鎖等區々トシテ全然一定シテ居ラナイ。併シ眞性腫瘍タル骨腫Osteomハ乳嘴突起ニハ見ラレルガ、外聽道ニ出現シタ報告ハナイ。Langeニヨレバ、從來Osteomト看做サレタノモ、實ハ纖維腫ヤ軟骨腫ノ化骨シタOsteofibromヤOsteochondromデアル。本症ハ外聽道骨部ニ於ケルExostoseデアツテ、同時ニHyperplasieヲモ含ム。從テ余等ハ骨増殖症ナル名稱ヲ好ンデ用ヒル。孰レニセヨ、Osteomデナクシテ、Exostoseナルコトハ明ニシテオカナケレバナラス。

成因。本症ノ原因ニ就テハ、次ノ如キ數説ガアルガ、今尙ホ甲論乙駁ノ域ヲ脱スルニ至ラナ

4.

1. 骨性外聽道ノ發育中又ハ化骨中ニ於ケル部分的増生。此説ハ耳科學ノ泰斗 Politzer ノ稱ヘル所デアル。
2. 骨性外聽道ノ限局性骨膜炎。
3. 外傷。特ニ外聽道ノ外傷性骨折(Wagenhäuser)ノ説。
4. 外聽道炎。Hedinger ノ報告シタ外聽道外皮ノ増殖セシモノガ化骨シタ例。Cooks ヤ Menière Dalley 等ノ報告シタ軟骨ヤ「ボリープ」ノ化骨シタ例ハ此中ニ算入スベキデアル。
5. 遺傳。Schwartzke ノ主張スルトコロデ。Kesselハ興味アル家系ニツイテ報告シテ居ル。
6. 微毒。Roosa ノ説。
7. 痛風。Toynbee ノ説。
8. 佝僂病。Karewski ノ説。
9. 耳硬化症。Meyer ノ説。
10. 海水浴ノ濫用。Field ノ説。

以上ノ外ニ尙ホ 2・3ノ説モアルガ、是等成因ニ關スル諸説中最モ勢力ヲ占メテ居ルノハ、最初ニ記シタ發育異常説デアル。而シテ更ニ各説ニ共通のニ信奉セラルテ居ルモノニ、素質説ガアル。是ハ本症ヲ罹患スルノハ素質が必要デアル。前述諸説ノ事項ハ要スルニ其發生誘因ニ過ギスト考フルモノデ、所謂遺傳説ニ一脈通ズル所ガアルノデアル。同時ニ此素質ニ關スル考ヘコソ、人類學的研究ノ礎石ヲ成スモノデアツテ、後ニ詳述スル積リデアル。

病理解剖。本症ヲ組織學的ニ檢スルト、次ノ2種ヲ區別スルコトガ出來ル。
瑛瑛性「エキソストーゼ」(Exostosis eburnea)

是ハ硬クシテ緻密ナル象牙質ヨリ成リ、血管腔ハ有スルガ髓腔著明ナラザルモノ。

海綿性「エキソストーゼ」(Exostosis spongiosa) 脆弱ニシテ海綿狀ヲナシ、髓腔ノ發達著シキモノ。

海綿質ノモノハ象牙質ノモノヨリモ成長ガ速カデアルト云ハレテ居ルガ、一般ニ象牙質ノモノニ接スルコトガ海綿質ノモノニ遭遇スルヨリ遙ニ多イ。併シ此兩者ニハ混合型乃至移行型ト見ルベキモノガアツテ、本質的ニ相違シテ居ルモノトハ考ヘラレナイ。Schwartzkeハ兩者ハ互ニ移行スルモノデアルト云ツテ居ル。以上ノ外ニ、極メテ稀ニ内部ガ氣泡ニナツテ居ルモノヤ(Autenrieth)、又全然空洞ニナツテ居ルモノ(Hansen)ガ報告サレテキル。

分類。本症ハ形狀ヨリシテ、大體ニ於テ限局性ノ腫瘍狀ヲナスモノト、彌蔓性ニナツテ居ルモノトノ2種ニ分類スルコトガ出來ル。臨牀的ニハ前者ヲ Exostose、後者ヲ Hyperostoseト云フコトガアル。往時ハ此兩者ノ區別ヲ盛ニ論ジ(Lobstein 等) Cassels ナドハ Hyperostoseハ Hyperplasie デアリ、Exostoseハ Neubildung デアルト主張シタコトモアツタガ、此兩者モ亦本質的ニ異ナル所ナク、其後 von Tröltsch 等ノ反駁ニヨリ現在デハ唯臨牀の便宜ノ爲メニ其名ガ存スルノミデ。學者ニヨツテハ Exostose ナル名稱デ兩者ヲ總稱シテ居ルノガアル。

發生部位。Virchow 及ビ Ostmann ガ解剖學的ニ調査シタトコロニヨルト、顙顙骨ノ鼓室部ノ邊緣デ、岩様部ト鱗狀部トノ接合部デアツテ、大及ビ小鼓室棘ニ相當スル所デアル。從テ骨性外聽道ノ外縁ニ見出スルコトガ多イ。

形状。限局性ノモノハ半球形・卵形・球形等ヲ呈シ、廣キ基底ヲ以テ外聽道骨部ニ移行スル。其限界ハ明カナモノモアルガ、不明ナモノガ多イ。稀ニハ有莖性トナリ(Körner, 中山, 石川)。更ニ其莖ガ破潰サレタリ。變性ニ陥ツタリシテ動搖性ニナツテ居ルコトガアル(Green, Szenes, Schuhmacher, Eulenstein)。彌蔓性ノモノハ外聽道ノ前又ハ後壁ニ於テ長軸ニ延ビ、高度ニナレバ輪狀ヲナシ、甚シキハ外聽道壁ヲ罅裂狀ニサセル。

大サ。限局性ノモノハ針頭大ヨリ胡桃大ニ至ル迄種々アルガ、最多ク報告サレテ居ルノハ大豆大ノモノデアル。第3表ニ示ス本邦人ノ大サハ、其巨大ナルガ故ニ報告サレテ居ルノデ、何レモ平均值ヨリ大デアル。外國デハ Green ノ長サ15mm、巾12mm、Kayser ノ長サ15mm、巾11mm 等ハ大ナルモノニ屬シ、Urbantschitsch ノ長サ30mm、巾25mm ノ如キハ寧ろ珍奇ナル例デアルト云ハネバナラス。

數。一定シテ居ラス。外聽道ニ1個シカナイ孤立性ノモノモアレバ、前後ノ兩壁カラ向ヒ合ツテ出テ居ルモノ、或ハ3個以上ノモノモアル。Kuhn, Schwartze, Politzer, Lucae 等諸家ノ意見デハ多發性ノモノガ孤立性ノモノヨリ多イト云ツテ居ル。余等ガ本邦文献其他ニ就テ調べタ範圍デハ、同様ニ多發性ノモノガ多イガ臨牀上屢ニ孤發性ノモノヲ見ル。勿論之ハ狹義ノ Exostose ヲ指シ、外聽道全汎ニ亘ル Hyperostose デハ數ハ問題外デアル。而シテ一般ニ孤立性ノトキハ外聽道後壁カラ發生スル方ガ前壁ヨリ出ルモノヨリモ稍々多イ。

側別。本症ハ左右ノ外聽道ニ兩側性ニ現レルコトガ多イ。斯カル際ニハ全ク左右相稱的ニ出

現スル。此側ニ關スル諸家ノ統計ヲ見ルト次ノ如クニナル。

報告者	Kessel	Körner	Bezold	Stein
兩側	70%	64%	45.6%	69.2%
偏側	30%	36%	54.4%	30.8%

即チ左右兩側性ニ現レルコトガ非常ニ多イ。併シ本邦ニ於ケル報告ヲ見ルト、偏側性ノ方ガ兩側性ヨリ多クナツテ居ル。次ニ偏側ニ就テ觀察スルト、Stein ノ報告ニヨレバ21例ノ内、15例ハ左、6例ハ右、Kessel ノ場合ハ22例ノ内、20例ガ左、2例ガ右デアツテ、一般ニ左側ニ遙ニ多イ。但シ本邦ノ報告デハ其差尠ク、左側ガ稍々多イノニ過ギナイ。

性別。Kessel ノ報告ニヨレバ74例ノ内、男ガ57例、女ガ17例、Stein ニヨレバ68例ノ内、男ガ49例、女ガ19例ニシテ男ノ方ガ壓倒的ニ多イ。併シ本邦デハ男ガ多イコトハ同様ダガ、其差ハ斯クノ如ク甚シクナイ。

年齢。是ニ就テハ Stein ノ統計ヲ表示スル。

第 1 表

患者ノ年齢	總數	男	女
10—20歳	4	4	—
21—30	14	11	3
31—40	19	4	5
41—50	18	14	4
51歳以上	23	16	7

即チ是ニヨレバ晩年ニナルニ從ヒ多クナリ、10歳以下デハナイ。Bezold ハ170例ヲ集メタガ、最低15歳以下ニハ發見出來ナカツタノデ、本症ハ發情期ニ發生スル疾患デアルト想像シタ。是ニ就テ長谷部博士ハ發情期ニ際シ、骨骼ガ急ニ大キクナルニツレテ、本症モ著明ニナルノデア

ラウト云ツテ居ル。Karewski ハ13歳ノ尙 癩病ノ少女ニ本症ヲ經驗シタ。

本邦ニ於テハ最低7歳(香宗我部)、最高50歳(猿渡)トナツテ居テ、此兩極端ハ共ニ我教室ノ經驗デアル。其他Fieldハ3歳ノ少女ニ本症ヲ見タト報告シテ居ルガ、概シテ幼者ニハ稀有ナルモノト見テ差支ヘナイ。

頻度。本症ハ自覺的苦痛乏シキ爲メ、本症ノミニテ醫師ヲ訪ネルノハ極メテ稀デ、多クハ他ノ耳ノ疾患ノ際ニ發見サレルノデアル。從テ本症ノミデ醫師ノ門ヲ叩クノハ一般ニ裕福ナル者ニ多イ。Bezoldガ本症ハ「ブルジョア」ノ疾患デアルト看做シタノハ此爲メデアル。皆テ其頻度ヲ見ルニ、寺田氏が明治37年、東大耳鼻科外來開設以來ノ患者總數1860人中4例ガアツタト報告シタ。昭和9年高島氏ハ京都府大耳鼻科外來患者7817名ノ内ニ3例アツタト云ツテ居ル。我が教室ノ外來患者ニ就テミルト5000名ニ付キ2例アツタノデアル。本邦ニ於ケル臨牀報告ハ明治32年佐藤氏が最初ノ1例ヲ報告シテ以來、昭和10年1月末迄ニ第3表ニ示ス如ク僅カニ14例ニ過ギヌ。然ラバ實際ニ於テ、何等ノ苦痛ナキタメ無自覺ニテ本症ヲ有シテ居ル者ノ頻度ヲ見ルニ、OstmannガMarburgノ小學兒童7537名ヲ検査シタノニ唯ダ1例シカナカツタト云ツテ居ル。本邦ニ於テモ、各種學校・團體ニ於ケル體格體查ニ際シ、専門家ニ依テ耳鼻咽喉科領域ニ就テ觀察セラレタ報告ハ枚舉ニ遑ガナイガ、本症ニ言及サレタモノガ1ツモナイ。

勿論看過サレタモノモ相當アラウガ、夫レニシテモ多クナイ事ハ明カデアル。余等ガ兒玉教授ノ教室ニ保存サレタ本邦人(アイヌ人ハ後述ス

ルニ付キ除ク)135ノ頭蓋骨中、1例ニ於テ兩側性ノモノヲ發見スルコトガ出來タ。注意スベキハ頻度ハ人種乃至土地ニヨリテ非常ニ左右セラル、コトデアルガ、此事ハ人類學の事項ノ部ニ於テ詳述スル。

臨牀的所見。限局性ノモノハ外聽道ノ骨部又ハ軟骨部トノ境ニ於テ、白色ヲ呈スル腫瘍トナツテ見ヘル。前者ハ時ニハ屢ニ鼓膜ノ直前ニアリ、爲メニ巨大ナル場合ニハ鼓膜が見ヘナイ。之ニ反シテ小ナル時ハ看過サレ易イ。消息子ニテ探グレバ骨特有ノ硬サノ爲メニ、診斷ハ比較的容易デアル。併シOsteomト鑑別セント欲スレバ、切除後組織的検査ヲ行ハナクレバナラナイ。有莖性ニナツタモノハ時トスルト、全ク軟骨部ノ方ニ移轉シテ居ルコトガアル。彌蔓性ノモノハ輕度ナレバ前壁又ハ後壁下半部ニ骨性ノ硬キ隆起ヲ認メ、高度ナルニ從ヒ其表面凹凸ヲ生ジ、甚シキハ鼓膜ノ觀察不能ナルニ至ル。診斷ハ此場合モ消息子ニテ探グルコトニヨリ、容易デアル。本症ハスクノ如ク診斷ハ容易デアルガ、此際本症ノミデナク、外聽道炎ノ如キガ合併シテ來ル時ハ、時トシテ多少困難ヲ呈スルコトガアルシ、又輕度ナレバ看過サレル虞レガ多分ニアルノデアル。

自覺的症候。輕度ナル場合ハ自覺的症候ハ全クナイ。巨大ニシテ外聽道ノ狹窄高度ナルモノハ、常ニ難聴ト耳鳴トヲ主訴トシテ居ル。稀ニ多發性ノモノガ増大シテ、相接觸シ表面ノ壓迫性壞疽ヲ起シ、或ハ化膿シテ劇痛ヲ訴フルコトガアル。Moosハ之ガ爲メニ激烈ナル三叉神經痛ヲ惹起セル例ヲ報告シテ居ル。然ラザル限り本症ハ一般ニハ自覺的症候ニ乏シイガ、他ニ外聽道炎・疔瘡・中耳炎等ガアルトキハ、排泄ヲ不

十分ナラシメル爲メニ。是等ノ疾患ノ經過ヲ甚シク不良ニサセル。從テ本症ハ是等ノ疾病ノ治療ニ際シ。偶然發見サレルコトガ多イ。Steinガ本症患者ノ耳ノ所見ニ就テ次ノ如ク表示シテ居ル。

第 2 表

聽器ノ所見	男	女	計
迷路性難聽	20	6	26
耳硬化症	5	3	8
慢性中耳炎	4	1	5
慢性中耳「カタル」	3	1	4
慢性中耳「カタル」 ＋迷路性難聽	4	1	5
急性中耳「カタル」	—	1	1
急性中耳炎	1	—	1
外聽道濕疹	3	2	5
外聽道炎	2	1	3
聾	3	1	4
外聽道損傷	—	1	1
特記スベキ所見ナ キモノ	4	2	6

此表デミルト。内耳性ノ難聽ガ一番多イガ。此事ハ老年ノモノガ多イカラデアル。耳硬化症ハ其次ニ位シテ居ル。是ハ患者ニ女子ガ少イ爲メ其數ガ多クナイガ。他ノ疾患ト比較シテハ密接ナル關係ヲ有シテ居ルコトガ知ラレル。其病理解剖ガ互ニ類似シテ居ルシ。又患者ノ素質ガ共ニ重要ナル役割ヲ演ジテ居ルコトヨリ考へ。本症ト耳硬化症トヲ同意義ニ解セントスル May-erノ說ハ興味アルモノデ。將來ノ研究ニ俟ツ所甚ダ大ナルモノガアルト信ズル。

治療法。苦痛ナキ限り放置シテ差支ヘナイ。其爲メニ外聽道ニ聾聾ヤ脱落上皮ガ蓄積サレタナラバ其度毎ニ洗滌スル。併シ前述ノ如キ苦痛

ガ現レテキタナラバ。鑿ト槌トヲ以テ手術的ニ除去スル。其方法トシテハ有莖性ノモノヤ。限局性デ容易ナルモノハ外聽道カラ入ルシ。困難ナラバ耳翼後縁近クニ皮膚切線ヲ置キ。外聽道ノ骨部ト軟部組織トヲ剝離シ。然ル後切除スル。通常相當ノ出血ヲ伴フコトガ多イ。

注意スベキハ鼓膜ト顔面神經トニ對スル保護デアル。殊ニ彌蔓性ノモノヲ切除スルコトハ。此點ニ於テ屢ニ非常ニ困難ナル手術ニ化スルノデアル。

第 3 表 本邦ニ於ケル臨牀報告

報告者氏名	患者 年齢	性	側	長 幅 重	耳所見又 ハ 症 候
佐藤 敏夫	12	女	左	小豆大	中耳炎
寺田 豊作	46	男	左		外聽道 癢 痒
寺田 豊作	35	男	右		難 聽
味戸 秀雄	23	女	右	1.0 0.4 1.0	耳 鳴 痒 痒
中山 繩	22	女	右	1.5 0.9 0.9	中耳炎
及川 邦治	39	男	右		中耳炎
玉越 與一	28	男	右		難 聽 耳 鳴
石川 恵助	30	女	左	1.1 0.9 0.6	
久保猪之吉	47	男	兩側		耳 鳴
藏田 恒人	44	男	左		難 聽 耳 鳴
高 田 藏	29	男	兩側	小豆大	中 耳 「カタル」
高 田 藏	27	女	左	小指頭大	中耳炎
香宗我部壽	7	男	左	小指頭大	中耳炎
猿渡 二郎	50	男	兩側	彌蔓性	中 耳 「カタル」

以上ハ明治 32 年 11 月佐藤氏が最初ノ例ヲ報告セル時ヨリ昭和 9 年末日迄ニ發表セラレタルモノデアル。但シ最後ノ 2 例ハ我教室ニ於ケル經驗デアル。

其患者ノ性ヤ側デ今迄記シタ歐羅巴ノ報告ト多少趣ヲ異ニシテ居ルモノガアルガ。是ハ我國ニ

於ケル報告例が少數ナルタメデ、恐ラク人種的差異ニ基クモノデハナイノデアラウ。何トナレバ後述スル様ニ歐羅巴人以外ノ人種ノ時モ、歐羅巴人ノ時ノ統計ト一致スルカラデアル。併シナガラ尙將來ニ於ケル臨牀家ノ精檢ヲ期待スルモノデアル。

人類學的事項

序 言

本症ノ成因トシテハ既述ノ如ク、數説ガ擧ゲラレテ居ルガ、併シ斯カル原因ガ存スレバトテ全テノ人ニ發生スルト云フ譯デハナイ。夫レデ結局本症ニ罹患スルニハ Disposition ガ必要デアルト云フコトニナルノデアル。此素質ハ Schwartz 等ノ説ク所ニ從ヘバ、遺傳スルモノデアルト云フ。併シ遺傳性ノ當否ハ暫ク措キ、其出現スルノヲ見ルト家系ノミナラズ、地方・民族・人種等ニヨツテ著シク程度ヲ異ニシテ居ルノガ分ル。例ヘバ Körner ガ Rostock デハ耳科患者ノ 3.86%ニ本症ヲ發見シタノニ、Frankfurt a. Main デハ僅カニ 0.74%シカ接シナカツタト報告シテ居ル。又一般ニ英國ハ大陸ニ比シテ多イト報ゼラレテ居ル。斯カル事實ハ本症ガ地方ニヨリ、或ハ民族ニヨツテ頻度ヲ異ニシテ居ル例デアル。又歐羅巴人ハ他ニ比シテ尠イコトガ發表セラレテ居ルガ、是ハ人種ニヨル素質ノ相違ヲ示スモノト考ヘラレル。

斯クノ如ク素質ガ重要ナル因ヲナス所ノ疾患ハ、敢テ本症許リデナク、他ニモ多數存スルノハ臨牀家ニハ周知ノ事デアル。併シナガラ斯カル素質ヲ遠キ昔、現代ノ人ノ如何ナル祖先ガ之ヲ多分ニ有シテ居タカ、又如何ナル人種ガ多ク持ツテ居ルカヲ知ランガ爲メニハ、死後ニ於テモ生前ト同様尙ホ明カニ認メ得ラレル疾患デナク

レバナラナイ。然ルニ斯クノ如キ條件ヲ充タス疾患トナルト著シク尠クナル。本症ハ純然タル骨ノミノ疾患デアリ、其位置モ厚キ顳額骨中ニ位シテ外部ヨリ影響ヲ受クルコト尠ク、例ヘ頭蓋骨ノ破損セルモノニ於テモ、軟部組織ノ缺如ノ爲メ生前ヨリハ却ツテ明瞭ニ認メラレ、且ツ外界ヨリノ觀察モ甚ダ容易ニ行ハレ、加フルニ素質ノ重要ナルコトガ既述ノ如クナルヲ以テ、上述ノ條件ニ適合スル點ニ於テ全ク理想的ノモノデアル。外聽道骨増殖ナル疾患ガ臨牀的ニ兎角輕視サレ勝ナノニ反シテ、人類學者カラ重要視サレル所以モ此處ニ在ルト思フ。

世界ニ於ケル分布

現在ノ臨牀報告ヲ基礎トシテ、本症ノ世界ニ於ケル分布ヲ見ルニ、夫レハ實際ノ分布頻度ヲ示スモノデハナクシテ、徒ラニ各地ニ於ケル耳科學ノ發達程度ヲ知ラセルニ過ギナイ様ニ思ハレル。本症ガ如何ニ多クトモ、之ヲ發見スル伯樂ガナケレバ其率ハ低イ。發掘サレタ頭蓋骨デハ、他ノ人種ヨリモ遙ニ尠イ歐羅巴人ニ於テ、臨牀的報告ガ却ツテ多イノハ此理由ニ基ク。故ニ精確ナル人種的分布ヲ見ントスレバ、人類學者ノ發掘シタ頭蓋骨ニ就テノ調査報告ヲ待タネバナラス。

先ヅ文献ニヨツテ大體外聽道骨増殖症ハ如何ナル人種ニ就テ、發見サレテ居ルカヲ調べル。最初ニ人類學の見地カラ本症ニ着目シタノハ Zschokke デアツテ、カノアンデス山麓ニ燦然タルインカ文明ヲ建設シタ古代ペルー人ノ頭蓋骨ニ本症ノ多イノヲ認メタ。次デ Seligmann ハ同様古代ペルー人ノ頭蓋骨 6 個ノ内、5 例ヲデモ本症ノ存スルノヲ發見シタ。Virchow ハ古代ペルー人ノ頭蓋骨 134 個ノ内、18 例即チ 13.5

%ヲ認メ。其原因ヲ頭蓋骨ヲ人工的ニ變形サセルコトニヨツテ岩様部ト鱗狀部トノ癒合ヲ困難ニサセ。其爲メ隆起サセルモノト考ヘタ事ガアツタガ。其後、頭蓋骨ニ全然變形ヲ與ヘヌ者ニモ屢々發見サレルニ及ンデ。此說ハ訂正ヲ餘儀ナクサレ。Turner モ亦本症ト頭蓋變形トハ關係ナシト主張シタガ。Ostmann ハ依然之ニ重要ナル意義ヲ附シタ。Ostmann ハアメリカ印度人ノ頭蓋骨 676 個ノ内、78 例即チ 11.5%。濠洲及比太洋洲人 283 個ノ内 10 例即チ 3.5%。歐羅巴人 1054。アジヤ人 491 個ノ頭蓋骨ノ内ニハ全クナク。773 個ノアフリカ人ノ頭蓋骨ノ内ニハ古代エジプト人(Philae 人)ニ 1 例發見シタノミデアツタト報告シテ居ル。其後是等ノ學者ト相前後シテ Welker, Ferreri, Ranke, Bernard, Darsey, Davis, Blake, Oettking 等ノ諸家ガ各民族ノ頭蓋骨ニ就テ調査シ。1932 年チリ人・ボリビア人ニ就テ報告シタ Møller-Holst, Gunnar ニ至ルマデ其人類學的研究報告ハ枚舉ニ遑ガナイ程デアル。今是等ノ調査成績ヲ綜括スルト。外聽道骨増殖ナル疾患ハ太平洋ヲ繞グル大陸乃至島ニ住ンデ居ル者ニ多ク發見サレ。大西洋ニ臨ム歐羅巴方面デハ稀有デアル。太平洋ニ臨ム諸國ノ内デハ、南北米ノ太平洋沿岸諸民族及ビミクロネシア・ボリネシア・メラネシア・インドネシアノ諸人種ニ多ク。蒙古人種ニハ尠イ。但シ是等ノ内デモ地方ニヨツテ顯著ナル差異ガアル。例ヘバ同ジ太平洋ノ Indonesien ノ内デモボルネオ島 Dajak 族ニハ極メテ多イガ。一衣帶水ノ瓜哇人ニハ見ラレナイ(横尾)。以上ノ内デ、出現率ノ高イモノヲ舉ゲルト。Oettking 氏ノ報告セル Chinook 人種ノ 23.4%。Blake

氏ノ Tennessee 人ノ 18.5%。横尾氏ノ Dajak 族ノ 16.6%(24 人ノ内 4 例)。Ranke 氏ノ Ancon 頭蓋 14.3% 等ハ著シイモノニ屬スル。

是等外聽道骨増殖ヲ伴フ頭蓋骨ノ長幅示數・外聽道ノ横斷面ニ關シテハ。Ostmann ハ各人種ニ就テ計測シ。以テ兩者ノ間ニ關係ヲ求メントシタガ。例外ガ多ク。未ダ一定セル結果ヲ得ルニ至ツテ居ナイ。併シ概シテ云ヘバ中頭又ハ短頭ニ多イ様デアル。頭蓋變形ト本症トハ幾度カ論ゼラレ。殊ニ Ostmann ハ人工的過短頭ニ多イ爲メ之ヲ重視シテ居ルガ。多少ノ誘因ニハナツテモ。深イ關係ハ無イ様ニ思ハレル。

以上ノ諸民族ガ殆ンド全部。海岸地方ノモノデアルコトハ注目ニ値スル。Field ノ海水浴濫用說ハ此點ニ於テ興味多イ。

本邦ニ於ケル分布

本邦人ニ就テハ少數デハアルガ。既述ノ如ク臨牀報告モ現レテ居テ。決シテ Ostmann ノ説ク如クアジヤ人ニハ存セスト云フ様ナコトハナイ。成ル程日本人以外ノアジヤ人ニ就テハ報告ガ極メテ乏シイガ。是ハ我國ノ耳科學ノ進歩シテ居ルコトヲ意味シテ居ルニ過ギナイ。臨牀報告ニ就テ見ルト。北海道カラ臺灣ニ至ル迄各地デ發見サレテ居テ。何レモ所謂大和民族ニ屬スル。從テ現在ノ大和民族ガ本症ヲ有シテ居ルコトハ議論ノ餘地ノナイトコロデアツテ。今後研究スルナラバ。本邦ノ如何ナル地方ニ之ガ多イカ。又ハ大和民族渡米以前ノ先住民族ニモ本症ガ存在シテ居タカノ 2 方面ニ別レル。此兩方面トモ未ダ材料ガ貧弱デアルガ。就中前者ノ地方の研究ハ將來更ニ多數ノ報告ヲ待タナケレバナラナイモノデ。目下ノ材料デハ遺憾ナガラ記載スルコトガ出来ナイ。此點各地専門家ノ臨牀的

調査ニ際シ留意セラレム事ヲ望ムデ已マナイノ
 デアル。併シ先住民族即チ石器時代ノ貝塚人ニ
 本症ノ存スルコトハ、既ニ明カトナツタ。
 本邦石器時代ノ頭蓋骨ニ本症ヲ發見シタノハ、
 東北帝國大學ノ長谷部教授が大正8年4月陸前
 國氣仙郡末崎村細浦上ノ山貝塚、次デ同郡赤石
 村大洞舞良貝塚ヨリ發掘シタ頭蓋骨ニ之ヲ認メ
 タノガ嚆矢デアツタ。同氏ハ細浦ヨリ4個、大
 洞ヨリ4個ノ頭蓋骨ヲ發掘シタルニ細浦ノ4個
 ト大洞ノ2個トニ之ヲ發見シタ。發見セラレザ
 リシ大洞ノ1個ハ幼兒ナリシヲ以テ、既記ノ如
 ク、本症ノ幼兒ニハ稀有ナリトノ理由ヲ以テ假
 リニ之ヲ除ケバ、總數7個ノ内6個マデ本症ヲ
 有シテ居ル譯デ、Seligmannノ古代ベルー人
 ニ認メタ以上ノ率デアル。殊ニ細浦ニ就テ云へ
 バ、同地ヨリ發掘サレタ頭蓋骨ハ總數30個ニ
 充タザルヲ以テ、此4例以外ニハ本症ガナイト
 假定サレテモ、其率ハ約13%デ世界的ニ高率
 ノ部ニ屬スル。何レモ壯年ノ男子デ、兩側性、
 1例ガ限局性ノ外ハ全テHyperostoseデアル。
 次デ三宅・今道ノ兩氏が既ニ大正15年ノ春ニ
 發掘サレテ、京都帝國大學ノ清野教授ノ所ニ保
 存サレテ居タ備後國太田貝塚人ノ頭蓋骨ヲ整理
 中、本症ノ多イノヲ發見シ、昭和6年11月ノ
 人類學雜誌デ報告サレタ。夫レニヨレバ、外聽
 道ヲ檢シタル35例ノ内、9例ニ存シ當ニ25.7%
 ニ相當スル。若シ本貝塚發掘骨數總計66例ニ
 シテ他ニハ本症ガナカツタシテモ13.6%デア
 ツテ非常ニ高率デアル。殊ニ前者ノ25.7%ハ
 Oettingerノ23.4%ヲ抜キ、現在世界デ報告セ
 ラレタル最高出現率デアル。何レモ成熟男子ニ
 シテ、兩側性ナルコトハ他ノ發掘報告乃至臨牀
 報告ト一致シテ居ル。

本邦石器時代人ノ外聽道骨増殖ニ關スル報告
 ハ、長谷部・清野兩教室ヨリ發表サレタノミデ
 アツテ、他ニハ未ダ之ヲ聞カナイ。而シテ既ニ
 發掘セラレタ石器時代ノ頭蓋骨ハ恐ラク幾百ヲ
 以テ數ヘラレル程デアルノニモ拘ラズ、陸中大
 船渡灣沿岸ト備後尾ノ道市郊外ノ、例ヘ同ジ太
 平洋岸トハ云ヘ、數百里離レタ唯2ヶ所ノミニ
 限ラレテ、非常ナル高率ヲ以テ發見サレタ事ハ、
 誠ニ興味深キモノト云ハネバナラス。

アイヌ人ニ於ケル外聽道骨増殖症

吾々ハ今ヤ本症ガ太平洋ヲ圍ム民族ニ多イ事
 モ知ツタシ、又吾々現在ノ同胞ニモ、更ニ遠キ
 昔ノ先住民族ニモ本症ノアルコトガ判明シタノ
 デアル。然ラバ我ガアイヌ族ニ在リテハ如何。
 アイヌノ人種學的地位ニ就テハ、茲ニ吾々ノ論
 ズル所デハナイガ、我國ノ石器時代人ト密接ナ
 ル關係ヲ有スルコトハ想像サレテ居ル。彼等ガ
 亦本症ヲ有スル他ノ民族ト同様ニ、太平洋ノ空
 氣ヲ吸ツテ居ル事モ明カデアル。故ニアイヌ民
 族ニ本症ガアツテモ不合理デハナイ。否寧ロ存
 在シテ然ルベキデアル。然ルニアイヌニ關スル
 研究始ツテ既ニ數10年、未ダ曾テ本症ニ關ス
 ル報告ヲ聞イタコトガナイ。遠ク小金井博士ガ
 アイヌ人頭蓋骨ニ就テ、近クハ平井氏が樺太アイ
 ヌノ頭蓋骨ヲ研究サレタトキモ之ニ關スル記
 載ガナイ。

本邦ニ於テ本症ヲ臨牀的ニ最初ニ報告シタ佐藤
 氏が東大小金井博士所藏ノ146個ノアイヌ人顚
 骨ニ關スル研究ヲ試ミタ際ニモ、1例モ報告
 サレテ居ラナイ。原田氏が白老・鵠川・節婦・
 高江・靜内・平取・二風谷等ノ北海道ニ於ケル
 著名ナルアイヌ部落ニ於テ男90人、女121人ニ
 就キ耳鼻咽喉科領域ノ觀察ヲセラレタコトガア

ツタガ。其際モ本症ニ就テハ何等ノ言及ヲサレテ居ナイ。又本學耳鼻咽喉科學教室開設以來ノ記録ヲ探グルニ、アイヌ人ノ本症ヲ有スルモノガ發見出來ナイ。茲ニ於テアイヌ民族ニ於ケル本症ノ有無ハ、人類學者ニハ勿論、臨牀家ニトツテ甚大ナル興味ヲ喚起問題トナツタ。偶々昨年兒玉教授ガ八雲アイヌノ頭蓋骨ヲ發掘シタ際ニ、本症ヲ有スル數例ヲ發見サレタノデ、永年ノ疑問ハ忽チ氷解スルニ至ツタノデアアル。以下同教授ヨリ貸與サレタ標本ニ就イテ其所見ヲ簡單ニ記載スル。

八雲ハ周知ノ如ク噴火灣ニ臨ム町デ、函館ヨリ81軒距ツテ居ル風光明媚ノ所デアアル。發掘地ハ其海岸ノ遊樂部濱デ南北約300間ニ亘ル一大アイヌ墓地デアアル。八雲ハ今コソ新シイ町ト

ナツテ居テアイヌ人モ僅カニ19戸79人ヲ算スルニ過ギナイガ、昔ハアイヌ部落トシテ盛デアツテ明治以前ニハ100戸以上モアツタト云フ。而シテ發掘サレタ墓地ハ、現在ノ墓地ト異ナリ、尠クモ今ヨリ150年以上經過シタモノト云ハレテ居ル。一般ニ海岸ニ近イ砂地ノタメニ人骨ノ保存ガ良ク行ハレテ居リ、昭和9年5月ヨリ7月ニカケテ兒玉教授ノ發掘セラレタ數ハ總計131體(男59體、女58體、小兒14體)デアツタ。

是等ノ發掘狀態、或ハ一般ノ觀察ノ如キハ同教授ヨリ別ニ報告スル所ガアルカラ、余等ハ唯外聽道骨増殖ニ就テノミ觀察スルコトニスル。而シテ主要ナル所見ヲ表示スルト次ノ如クニナル。

第 4 表

番號	性	推定 年齡	頭蓋 長幅 示數	頭蓋 型	外聽 道側	骨性 外聽 道長 サ	外聽道横斷		骨 増 殖							
							長徑	短徑	有無	形狀	數	表面	限界	發生壁	長	幅
Y12	♂	成人	71.4	長頭	左	18	12	9	—							
					右	19	14	8	+	限局	2	平滑	明瞭	前 後	5 6	4 4
Y14	♂	成人	78.4	中頭	左	20	15	9	+	瀾莖	1	平滑	不明	前 後	9 6	4 5
					右	20	14	9	+	瀾莖	1	平滑	不明	前 後	7 6	5 4
K2	♂	成人	79.0	中頭	左	19	11	7	+	限局	1	平滑	明瞭	前	8	5
					右	19	13	9	+	限局	1	スコシ ク粗	明瞭	後	6	4
S45	♂	成人	75.9	中頭	左	18	10	7	+	瀾莖	2	平滑	不明	前 後	6 6	4 4
					右	19	12	8	—							
T6	♂	成人	79.3	中頭	左	19	15	11	+	瀾莖	1	平滑	不明	前 後	8 7	5 4
					右	20	13	10	—							

(計測單位 mm)

先ヅ頻度ニ於テ、總數131體ノ内小兒14體ヲ除ケル117體ノ内5例ナルヲ以テ約4.5%。モトヨリ他民族ニ比シテ特記スベキ程ノ高率デハナ

イガ。現在ノ本邦内地人ヨリハ稍々多イノデハナイカト思フ。

孰レモ成熟男性デアツテ、此點ハ他ノ報告ノ場

合ト一致シテ居ル。唯、側別ニ關シテハ異ナリテ、兩側2例、偏側3例（其内左2、右1）デ偏側ノ方が多イ。

外聽道ハ多少狹キ卵圓形ノ横斷面ヲ呈シテ居ル。

其前後下壁ヨリ彌蔓性ニナツテ、限局性ナノハ唯1例ニ過ギス。表面ハ概ネ平滑デ前者ハ不明瞭ナル限界ヲ以テ周圍ノ外聽道ニ移行スルガ、後者ノ限局性ノモノハ明カデアル。

大サハ普通ニミラル、大豆大ノモノデ、特ニ巨大ト稱スベキ程ノモノハナイ。

頭蓋型トノ關係ヲ見ルト、一般アイヌ頭蓋ノト同様ニ長頭1例、中頭4例ニシテ、短頭ナク特ニ本症ト頭蓋型トノ間ニ直接ノ關係ハ存シテ居ナイ様デアル。

余等ハ更ニ兒玉教授ガ十勝ノ浦幌地方ヨリ蒐集セラレタ43個ノアイヌ頭蓋骨ニ就テ檢シタルニ、此方ヨリハ唯ノ1例モ本症ヲ發見スルコト

ガ出來ナカツタ。浦幌ハ北海道ノ中心ヲ流レル十勝川ノ河口ニ近ク、直接太平洋ニ面シテ居ル所デアルガ、八雲アイヌニ相當存スルノニモ拘ラズ、例ヘ其發掘數ガ劣ルトハ云ヘ。浦幌方面ニ一例モナイノハ、如何ニ本症ノ分布ガ人種ノミナラズ、地方的ニモ片寄ツテ居ルカヲ思ハセルノデアアル。

兎ニ角今ヤアイヌニモ外聽道骨増殖ノ存在スルコトハ明カニナツタノデアアルカラ、今後各地ノアイヌノ人類學的研究ニ際シテハ勿論、臨牀的觀察ノ時ニモ本症ノ有無ニ注意ヲ拂フコトヲ惜シマナケレバ、アイヌ人種ノ研究ニ當リ、有力ナル參考材料ヲ提供スルニ至ルデアラウ。余等ハ本篇ニ於テ未ダ曾テ報告セラレザリシアイヌ族ニ於ケル本症ノ存在ヲ證明シタガ、是ガ前述ノ如キ將來ノ研究ニ對スル端緒トモナリ得バ、余等ノ期待ハ充タサレルノデアアル。

擧筆スルニ當ツテ、御指導並ニ御校閲ヲ賜ハツタ兒玉・香宗我部兩教授ニ對シテ深甚ナル謝意ヲ表スルモノデアアル。

引用文献

- 1) 佐藤敏夫：外聽道骨腫ノ1例、大日耳鼻、第5卷。
- 2) 佐藤敏夫：日本人及アイヌノ顙顚骨乳嘴部、大日耳鼻、第29卷。
- 3) 寺田豊作：巨大ナル外聽道骨腫、大日耳鼻、第11卷。
- 4) 味戸秀雄：外聽道骨腫ノ大ナル1例、大日耳鼻、第22卷。
- 5) 中山繩：外聽道 Exostose ノ供覧、北越醫會報、第189號。
- 6) 及川邦治：外聽道骨性閉鎖症ノ1例、好生館醫研究會誌、第20卷。
- 7) 玉越興一：外聽道骨増殖症ノ1例、臺灣醫會誌、第150—151號。
- 8) 石川憲助：巨大ナル外聽道内骨腫ノ1例、福岡醫大誌、第18卷。
- 9) 久保猪之吉：外聽道ノ兩側性骨腫、日醫界、第21卷。
- 10) 藏田恒人：顙顚骨骨増殖ニ因スル外聽道ノ狹窄、臺灣醫會誌、第32卷。
- 11) 高島藏：外聽道贅骨腫ニ就テ、京都府大、第39回

- 耳鼻咽喉科集談會。
- 12) 平井隆：樺太アイヌ人頭蓋骨ノ研究、人類學誌、第42卷附錄。
- 13) 原田雄吉：アイヌ人種ニ行ヒタル耳鼻咽喉科領域ニ於ケル觀察、大日耳鼻、第36卷。
- 14) 小金井夏精：人類學研究、東京（大正15年）。
- 15) 長谷部言人：石器時代人ニ外聽道骨瘤ノ見ラルルコト附註上骨、人類學雜誌、第39卷。
- 16) 長谷部言人：陸前氣仙郡大船渡灣附近ノ石器時代人ニ外聽道骨腫多シ、人類學誌、第40卷。
- 17) 三宅宗悅、今道四方爾：備後國大田貝塚人ノ外聽道骨腫ニ就テ、人類學誌、第46卷。
- 18) 清野謙次、日本石器時代人類、
- 19) 金關丈夫：日本人ノ人種學、
- 20) 横尾安夫：Dajak 骨格ノ人類學的研究、人類學誌、第46卷。
- 21) Bauer und Stein：Konstitutions-

pathologie in der Ohrenheilkunde 1926 Berlin
 Bezold: Lehrbuch der Ohrenheilkunde 1906. 23)
 Cassels: Ueber die Aetiologie des Exostosen
 des Ohres und ihre Entfernung. Zeitschr. f.
 Ohrenheilk. Bd. 10. 24) Eulenstein: Beweg-
 liches spongiöses Osteom des Knorpeligen Teiles
 des Gehörgangs. Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 34. 25)
 Cocks: Gestielte Exostosen im äusseren Gehör-
 gang. Zeitschr. f. Ohrenheilkunde Bd. 13. 26)
 Ferreri: Ueber Exostosen des äusseren Gehör-
 gangs. Internat. Zentralbl. f. Ohrenh. Bd. 3. 27)
 Hartmann: Ueber Hyperostose des äusseren
 Gehörgangs. Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 30. 28)
 Hedinger: Ueber eine eigentümliche Exostose
 in Ohr. Zeitschr. f. Ohrenheilk. Bd. 10. 29)
 Hellmann: Ueber solitäre spongiöse u.s.w.
 Zeitschr. f. H. N. O. H. 81. 30) Hermann:
 Exostosen des Gehörgangs. Handbuch der spe-
 ziellen pathologischen Anatomie und Histologie
 von Henke und Lubarsch. 31) Körner: Lehr-
 buch der Ohren-Nasen-und Kehlkopfkrankheiten
 1920. 32) Körner: Gestielte Exostosen neben
 der Spina suprameatum. Monatschr. f. Ohrenh.
 Bd. 28. 33) Körner: Die Exostosen und
 Hyperostosen im Gehörgang und die Osteome
 in den Operationshöhlen des Schläfenbeins.
 Zeitschr. f. Ohrenheilk. Bd. 48. 34) Kessel:
 Exostosenstemma, Zeitschr. f. H. N. O. Bd.
 8. 35) Kurewski: Deutsche med. W.
 Nr. 3, 1892. 36) Lange: Die Geschwülste

des äusseren Ohres. Handb. d. pathol. Anat.
 von Manasse Wiesbaden 1917. 37) Lucac:
 Kasuistische Beiträge zur Bedeutung u.s.w.
 der Exostosen des äusseren Gehörgangs. Arch.
 f. Ohrenheilk. Bd. 17. 38) L. B.: Zur
 Kasuistik der Knochengeschwülste des äusseren
 Gehörgangs. Arch. f. Ohrenheilk. Bd. 17. 39)
 Martin B.: Lehrbuch der Anthropologie 1928.
 40) Mayer O.: Berichte über die Ergebnisse
 weiterer Untersuchungen zur Otosklerosefrage.
 Zeitschr. f. H. N. O. Bd. 6. 41) Moos: Exos-
 tosen. Arch. f. Ohrenheilk. Bd. 17. 42) Ost-
 mann: Lehrbuch der Ohrenheilkunde. 1909.
 43) Ostmann: Beiträge zur den Vorkommen
 von Exostosen des äusseren knöchernen Gehör-
 gangs bei der verschiedene Völkerrassen. Monat-
 schr. f. Ohrenheilk. Bd. 28. 44) Politzer:
 Lehrbuch der Ohrenheilkunde. 5. Aufl. 45)
 Roosa: Knochengeschwülste. Lehrbuch d. prakt.
 Ohrheilk. 1889. 46) Schmacher: Eine frei-
 gewordene Exostose im Beriches des Knöchernen
 Gehörgangs mit häutigen Stiele. Monatschr. f.
 Ohrenheilk. 1915. 47) Schwartze: Chirrug.
 Krankheiten des Ohres. 1885. 48) Schwartze:
 Handbuch der Ohrenheilkunde. 1892. 49) Selig-
 mann: Exostosen bei Peruaner Schädeln Ref.
 Arch. f. Ohrenh. Bd. 1. 50) Turner: On Exos-
 tosis with external auditory meatum. Zeitschr. f.
 Ohrenheik. Bd. 8. 51) Urbantschnittsch: Oest.
 ot. Gesell. 1891.